

妊産婦と実母との関係性が出産体験に及ぼす影響

—「豊かな出産体験」の阻害要因について—

松本亜紀（倫理研究所専門研究員）

緒言 —問題の所在と本稿の目的—

本稿の目的は、妊産婦の被養育体験と出産の関連性、具体的には、実母との関係性が出産に及ぼす影響を探り、「豊かな出産体験」をする上での課題を明らかにすることにある。

近年、日本における少子化傾向を受けて、少子化対策としての子育て支援策が展開されている。従来の子育て支援策では、母親が一人で子育ての悩みや不安を抱え込まぬよう、子育てのストレスや負担を軽減すべく男性の育児参加や地域・社会による子育ての社会化の促進が図られてきた。また、女性の機会費用（子供を産み育てることによって失われる効用・利益）の観点から、働く母親を支援する環境整備にも重点が置かれている。

しかしながら、児童虐待件数は増加の一途をたどっている。平成 12（2000）年の「児童虐待の防止等に関する法律」（通称、児童虐待防止法）の成立以降、乳幼児に対する虐待問題が指摘されているが、厚生労働省の報告によれば、児童相談所に寄せられる児童虐待の相談対応件数（平成 24 年度）は、児童虐待防止法施行前（平成 11 年度）の 5.7 倍に増加しており（66,701 件）虐待死は高い水準で推移しているという。児童虐待の背景には母親の育児不安が潜んでいる。育児不安の要因としては、「泣き止まない」「上手におっぱいを飲んでくれない」「他の子に比べて成長が遅い」など、主に乳幼児の健康や成長に関する知識不足によってもたらされる心配や不安が挙げられ、その背景にある親自身の成育歴による自尊感情の低さや被害的認知が指摘されている。

しかし、子育ては本当にストレスを抱えるような経験なのだろうか。むしろ、なぜ、現代の母親は子育てをストレスだと捉えてしまうのだろうか。筆者の問題意識はこの問いに集約される。リスクや負担を前提に子育て支援の議論を重ねたところで、実際に産み育てる女性の出産意欲が高まらない限り、出生率の上昇は望めない。むしろ、子育てが「ストレス」や「負担」などネガティブに表現されることによって、次世代の子育てに対するイメージが深く損なわれてしまう可能性を孕んでいる。

子育てで以前の妊娠・出産についても同様のことが言えよう。現代の若い女性は子供を持つことに対しては肯定的な印象を持っているものの、出産に対しては「痛そう」「辛そう」といった否定的なイメージを抱いているという。実際に、出産そのものを肯定的に捉えられるような話を先の世代から聞いた経験がないと回答した女性は約 40%に達しており、妊娠・出産における世代間伝承が出産イメージに影響を及ぼしていることが示唆されている。

筆者は前稿において、「豊かな出産体験」をした女性が、その後の育児にスムーズに移行するという先行研究の成果を踏まえ、妊娠・出産期に着目した子育て支援のあり方について言及した。「豊かな出産体験」とは、津田塾大学教授で母子保健の専門家である三砂ちづる氏によって定義された「身体に向き合い、女性の人生の変革につながるような出産体験」を指す。本稿はそれを承けて、実母との関係性が出産体験に及ぼすという視点に立ち、豊かな出産体験をする上での課題を明らかにする。